

ニコラ・プッサンと イエズス会図像の研究

木村三郎 著



N・プッサン 《ザビエルの奇跡》

中央公論美術出版

本書の目的

本論文集「ニコラ・プッサンとイエズス会画像の研究」は、筆者が、過去二十年にわたって継続してきた研究である。その性格を説明するためには、はじめに、《聖フランシスコ・ザビエルの奇跡》(口絵一)ありき、という言葉が当てはまるであろう。フランス十七世紀を代表する画家プッサンが描いた、現在、ルーヴル美術館に展示されている作品である。

目次に示されているように、この論文集には、二つの柱となる問題意識と目的がある。一つは、「一六四一年のパリ」、そして「ザビエルにまつわる画像学」の研究である。

1 なぜ、プッサンの一六四一年パリ滞在期の研究を行うのか

一六四一年とは、プッサンが、一六二四年にローマに遊学した後、パリに一時帰国し滞在している年である。本論文集は、この年における美術を取り巻く文化環境論が、一つの柱をなしている。なぜ、この年にこだわるのか。それは無論、この画家が描いた上記の《ザビエルの奇跡》の制作年であることが理由である。

従来から、プッサンのパリ滞在期については、この画家についてのどの研究書も触れている。滞在時期に書かれた書簡が知られていて、画家ヴェーエ、そして版画家ムランとの確執などがしばしば指摘されてきた。しかし、本論文集においては、そうした事実だけでなく、むしろ、その環境に不適應をおこしながら滞在していた、画家プッサンの周辺にあった文化的な条件について論じた。画家を召還した国王の周辺と作品の注文主の動向を縦軸に、一方で、そこに発生していた極東への関心を横軸に設定しながら分析を試みたものである。二十世紀以降の美術史家にとっては、プッサンがザビエルのテーマを描いた、ということはほとんど問題になることはなかった。しかし、この歴史的条件は、掘り下げれば掘り下げるほど、忘れられていた興味深い事実が浮上してくるのである。

十五世紀末に、グーテンベルグが印刷術を発明して以降もたらされた文化上の変容は、現代と比べるときわめて緩慢なものではあったが、一つの文化革命をもたらしたことに間違いない。多数のイメージが同時に生産可能な版画の媒体力は、文化の深い地層にただならぬ変革を強いた。いささか大げさな言い回しになるかもしれないが、二十世紀末以来のIT革命が、同一情報が瞬時に地球を駆けめぐることが可能にしたように、十六世紀の版画の流通は、到達時間こそ悠然としたものではあっても、どこか似たものがある。イエズス会の布教目的の版画は、地球の裏側の東洋にまで到達していたのだから。時の枢機卿リシユリュエは、そうした媒体力を熟知していた。それゆえに、王権の中央集権化と、とりわけカトリックの宗教政策のために、ルーヴル宮に王立印刷所を作ったのである。それは、反宗教改革以降の統制の装置としても働き、他方は、文学、芸術を含めた文化の起爆装置として意味を持った。第四章では、この頃に成立する印刷所周辺の事情と、その政策の一環として、新しい美術行政のためにアート・ディレクターとしてローマから帰国を求められたプッサンの位置について論じている。一六四八年には、パリで、王立絵画彫刻アカデミーが成立する。さかのぼること七年前の一六四一年に、ルーヴル宮に居を与えられたプッサンの周辺には、制度としての改革と新しい文化政策が蠢動していたといえよう。

2 なぜ、イエズス会画像を、なかでも、ザビエルの画像の研究を行うのか

聖フランシスコ・ザビエルにまつわる画像研究、というもう一つのテーマは、我が国における西洋近世美術研究に携わる学徒の間でも、いささか奇異な印象を免れないともいえる。時折、そうした質問を受けてきたからである。このテーマに関して、ここで若干、趣旨説明を行っておきたいと考へる。

フランスにおける十七世紀のキリスト教美術についての先行研究については、論文2で論じることとなる。単純にいつてしまえば、本格的な研究がすこぶる乏しい対象なのである。同じプッサンを中心とした神話画像研究は、パノフスキーの影響もあり、英米系の研究者から多くの成果が生まれている。しかし、キリスト教画像学には多くない。ということは逆にいえば、創造的な研究がなされる領域だということである。

ザビエルという歴史上の存在は、十六世紀の半ばに我が国を訪れ、キリスト教を伝えた人物であることはいままでもない。この事實は、西洋の近代キリスト教画像学において、日本の研究者がながしかな新知見を欧米の美術史学会に寄与できるとすれば、格好のテーマであった。キリスト教画像学の権威であったマールの残した業績にしても、イエズス会画像一般は論じて、東洋との係わりを詳しく論じた成果は見あたらないからである。そこには、ジャポニスム研究と同じ条件が認められるのである。

版面見本 (25%縮小)

3 プッサンのパリ滞在期



図3 A・ヴェーエ
《十字架のキャンパのタンクレディ》
1605頃



図4 A・ヴェーエ
《アルタンと闘えるコロリダとアルガンテ》
同前



図5 A・ゴッス
《フォンテンブロー宮全景》
1642年



図6 マルヌ
《ヴィンセンヌの城本》
1642年



図7 フォンテンブロー宮《新築の間》

— 目 次 —

カラー図版

省略記号

序——目的と方法

一 目的 (1 なぜ、プッサンの1641年パリ滞在期の研究を行うのか・2 なぜ、イエズス会図像を、なかでも、ザビエルの図像の研究を行うのか) / 二 方法 (1 図像学の方法——ワールブルグ研究所とプッサン研究・2 出版史の方法——物語画の周辺にある挿絵と版画の視点から、物語画の誕生を捉え直す研究・3 南蛮学の方法——先学による豊富な研究・4 フランス美術史学の方法——1970年代以降のパリ実証主義研究・5「場」の理論とその方法——イメージが制作される環境〈フォワイエ〉とは何か)

第Ⅰ章 十七世紀前半のパリにおけるキリスト教美術

- 1 トリエント公会議と聖画像論
- 2 十七世紀前半のパリにおけるキリスト教美術——聖人図像表現の変容

第Ⅱ章 1641年のパリとプッサン

- 3 プッサンのパリ帰国前後——シュブレ・ド・ノワイエとヴェーエとその周辺
- 4 プッサンのパリ滞在——1641年
- 5 プッサン作《ザビエルの奇跡(日本の鹿児島で死んだ娘を蘇らせる聖フランシスコ・ザビエル)》の典拠について
- 6 シュブレ・ド・ノワイエとイエズス会
— 十七世紀前半のパリにおける美術保護者とその信仰

第Ⅲ章 フランドル美術とパリのイエズス会

- 7 リーパ・ルーベンス・ベローリ——ルーベンス作《聖フランシスコ・ザビエルの奇跡》について
- 8 ヴァン・ダイクの1641年パリ滞在——大旅行家たちの集いとイエズス会の文化環境
- 9 通称《日本の王に拝謁する聖フランシスコ・ザビエル》の絵画について

第Ⅳ章 パリの十七世紀出版事情と日本

- 10 十六世紀末から十七世紀前半において、フランスに紹介された日本——キリスト教布教の事情の認知と日本研究の進展
- 11 ドゥーエーとパリ——十六世紀末から十七世紀前半のフランスにおける、日本関係図書の刊行とイエズス会周辺の出版業者
- 12 版画《長崎の王》のモデルは誰か——十七世紀のフランスで描かれた大村純忠

第Ⅴ章 ザビエルの図像学

- 13 燃える心臓——シャンペーニュ、そしてヴェーエ
- 14 西洋十六—十七世紀における《煉獄》の図像について
- 15 1600年前後に西洋と日本で描かれた聖フランシスコ・ザビエル像の肖像について
- 16 《インドで布教する聖フランシスコ・ザビエル》について
- 17 神戸市立博物館所蔵《聖フランシスコ・ザビエル像》について

終章 補遺と結論

- 18 パリ在住のフランドル版画家集団とオルレアンで描かれたロヨラとザビエル
- 19 結論

〈資料〉十六世紀末から十七世紀初頭にヨーロッパで刊行された、聖フランシスコ・ザビエルの伝記関係地域地図／初出一覧／あとがき／図版目録／索引／仏文要旨

17世紀フランスの画家、ニコラ・プッサンの描いたイエズス会図像、そしてフランシスコ・ザビエルに関する研究を主題に、フランス近代研究と東西交渉史という大きな観点から図像学、出版史、南蛮学、実証主義研究、「場」の理論の方法など、様々な手法を駆使して日本人研究者としての新知見を提示した、著者20年にわたる研究成果の結実。

平成19年3月刊



■体裁 B5判 上製函入 本文400頁
口絵カラー16頁

■定価 27,300円（本体26,000円＋税）
ISBN978-4-8055-0537-3 C3071

—— 著者略歴 ——

木村三郎（きむら・さぶろう）

1948年東京生まれ。
東京大学文学部仏文学科卒業。同大学院美術史専攻修士課程修了。
フランス政府国費留学生として渡仏後、パリ第4大学博士課程修了、
文学博士。
その後、放送大学客員教授、コレージュ・ド・フランス客員研究員を経て、
現在、日本大学芸術学部教授。西洋美術史専攻。

主要著書

『ニコラ・プッサン』中央公論社、1984年（共著）
『ダヴィッド』美術出版社、1987年（翻訳）渋沢・クローデル賞受賞
『西洋絵画作品名辞典』三省堂、1994年（共著）
『美術史と美術理論』放送大学教育振興会、（1992）1996年
『名画を読み解くアトリビュート』淡交社、2002年

日仏美術学会常任委員、アート・ドキュメンテーション学会評議員、
日本18世紀学会常任幹事、所沢市社会教育委員

本書の特色

17世紀前半のパリの絵画史、プッサンと同時代の西洋絵画史と東西世界の交渉史を5つのアプローチから解明する。

1、図像学の方法

ワールブルグ研究所、とりわけパノフスキーのプッサン研究を参考にしつつ、キリスト教聖人図像を研究する。

2、出版史の方法

図像学だけでは解明しきれない、歴史を構成する諸要素を書物史、書誌学的・情報学的ドキュメンテーション研究の成果を援用する。

3、南蛮学の方法

歴史上のイエズス会資料、とくにキリシタン関係の貴重な資料が日本国内に集積されている。ポルトガル語、フランス語をはじめとした草稿や同時代の刊行物を活用する。

4、実証主義的方法

厳しい資料批判の方法を前提に美術史的に意味の認められる作品と一次資料を発掘し、歴史的観点から整合性のあるものに仕立て上げ再構成してゆく。

5、「場」の理論と方法

イメージが発生する歴史的な環境の必然性を発掘し、従来の方法では見えなかった歴史を敢えて蘇生させる。



《聖フランシスコ・ザビエルの像》（神戸市立博物館）

お取り扱いは

中央公論美術出版

<http://www.chukobi.co.jp>

〒104 - 0031 東京都中央区京橋 2 - 8 - 7
電話 03 (3561) 5993 FAX 03 (3561) 5834